

団塊のカタログ

ワシら

トシタロー・クラフィティ

今回はちょっと目先を変えてみる。

湯島と平賀の天神様

ワシが生まれたのは江東区亀戸、育ったのは文京区本郷、学んだところが文京区立湯島小学校、湯島と言えば白梅と天神様である。

時の最高権力者藤原氏の中傷で太宰府に左遷され、悲惨な生涯を終えた菅原道真（834年～899年）を奉る天満宮の一つだ。

こち

東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花
あるじなしとて 春を忘れそ

梅の花よ、東の風が吹くようになったら匂いをあたり一面にまきちらしてくれ。ボクがいなくても春を忘れないでね……そんな意味だが、何ともいじけた歌である。

それほどイヤイヤながらの転勤（左遷）だったのだ。公務員の「すまじきは宮仕え」の悲哀にも相通じるものがあって、そう考えると急に身近な人に思えてくる。

そんな道ちゃんミチミチ、死んでからも死にきれず、夜な夜なご近所の枕元に現れてはグチをこぼす。「ボクの一生はなんだったんだろう」イジイジ、クドクド、クドクド。

「こりやたまらんワイ、成仏なされい」と閉口した太宰府の人たちが建設したのが太宰府天満宮で、未練が残る生地京都に建てられたのが北野天満宮？なのだろう。

てなわけで、天満宮は太宰府系（死んだところ）と北野系（生まれたところ）があって

そのチェーン神社は全国各地に1万2千とも3千ともいわれている。（未確認情報）

権力者に逆らって出世コースからはずれたのにもてはやされているのも奇妙な気がするが、学問に秀でていたところから受験生にありがたがられているというのが定説だ。

そのせいかどうかは知らないが、確かにそこら中にある。ワシ自身、生まれたところに亀戸天神、育ったところに湯島天神、今いる松戸市平賀のすぐそばにも、ちっぽけな天満宮がある。この平賀天神、敷地面積57坪ほどのセコい神社で、神主なんか見たことないし梅の木も申し訳程度に5本あるだけで、受験生にも絵馬にもお目にかかったことがない。

たまに町会の会合などに利用されているだけだが、一応天神ブランドではある。

ご存じ！本土寺

天神様が梅なら本土寺は藪の中の紫陽花で8月27日にTBS「噂の！東京マガジン」で紹介され、あらためて皆さまにはおなじみになった。JR北小金駅の北口で降りて100m程先の信号が参道の入口で、突き当たりの駐車場を斜め左に進むと仁王門が見える。

そこから石の階段を下りれば本土寺の入口にたどり着く。無料入場は許さないゾとばかりに門はしっかりと閉ざされ、人ひとりやっと通れる位の木戸があって入場料500円をブンどられる。参道は幅5m×長さ250mの転売不可能の土地だが、ここを横切る所に新築する際は、建て主は土地の一部を強制的に

寄進させられる。これが本当のテラ銭、こんな土地をも押しつけての5億円なのだ。

地権者の坊主と強大な職務権限を持つ市長とパシリの市議、このお笑い3人組が手を組んだら敵はいない。**本土寺**は地元民にしてみれば単なる迷惑施設で、アジサイ時期に押し寄せるクルマと人には腹が立つ。もともと狭い道を大型バスがすれちがい、その間を駅からの観光客が行き来し、さらにその隙間を地元民が小さくなってすり抜けて行く。

参道周辺のお店はアルバイトのおばさんを雇うから雇用の促進にはなるが、宗教法人の**本土寺**は納税しないから市税収入には結び付かない。消費税も、むろん納めやしない。

境内で売られるお守りや参拝客自ら放り込むおさい銭は宗教行為の一部として非課税はいいとしても、入場料を参拝料と言いくるめて課税されない優遇税制の坊主丸もうけに加えて、持ってけドロボーの5億円ときは市民の皆さまのお怒りももつともである。

そうはいつでも例えば京都、信仰心を抱いて入場する観光客信者はまずいないが、金閣・銀閣がなければ観光都市として成り立たないし、そうなれば京都市もコまる。

同様に、松戸市にとっても**本土寺**の存在意義は決しておろそかにできない。市の南東に八柱霊園なる東京都指定のお墓の団地があつて、春と秋のお彼岸時期には市外から多くの墓参客が訪れる。他には松戸競輪場、この3カ所以外にヨソモノが何らかの目的を持って松戸を訪れることは滅多にない。

「矢切の渡し」にしても、そのまま対岸の柴又に戻って帝釈天で草団子なんか買って帰られちゃうし、駅ビルのポンテとか歩いて2分のアーバンヒルはアツと言う間に廃墟と化し、古くからあつた長崎屋なんかとつくに撤退し、今残っているDマートや伊勢丹にしても、駅から離れているものだから便利が良く

ない。わずかに駅ビルのボックスヒルだけが駅に直結しているだけだから、駅周辺は日曜日でもガラガラ、逆にゆつくり買い物できるのが皮肉である。一方の**本土寺**、ピーク時には日に2万人が訪れるというから、周辺の商店や農家にもたらす利益はバカにならないが問題はすれ違う観光バスと自家用車だ。

今まで大事故がないのも日蓮上人の御利益かも知れず、そうなりや5億円はおさい銭ってか、坊主丸もうけを許してこのまま死ぬるかってんで、ワシのクルマには真っ赤な文字で「返せ5億円」「ふざけるな本土寺」「ゆるさない坊主丸もうけ」「ナメんなよ市長・関川・クソ坊主」と書きなぐつてある。

東京午前3時

タイトルに地名が登場する歌謡曲、いわゆるご当地ソング、都道府県別コンテストをやれば「東京」がダントツだ。

昭和になつてからでも**東京行進曲**（♫昔恋しい銀座の柳→4年）**東京音頭**（♫踊り踊るならチョイト東京音頭→8年）**東京ラブソディ**（♫花咲き花散る宵も→11年）**東京の花売り娘**（♫青い芽を吹く銀座の柳→21年）**東京ブギウギ**（♫東京ブギウギリズムうきうき→23年）**東京キッド**（♫歌も楽しや東京キッド→25年）**東京シューシャインボーイ**（♫サーサ皆さん東京名物とつてもシツクな靴みがき→26年）**東京アンナ**（♫ライトの虹を踏みながら→30年）**東京の人よさようなら**（♪海は夕焼け港は小焼け→31年）そしてこの年の**東京だよおっ母さん**と、こんなにある。

その一方でライバルの大阪は**道頓堀行進曲**（♫赤い灯青い灯→3年）**浪速小唄**（♫いとし糸ひく雨よけ日よけ→4年）のわずか2曲のみで、しかも直接タイトルにはなっていないのが情けない。今でこそ千葉県松戸市に住

んでいるが、元はといえば東京生れ東京育ちのワシ、こんなつまないことでも優越感にひたってしまう。この大阪の不振を尻目に長崎が大健闘、そのものズバリの**長崎物語**（14年）を筆頭に**長崎エレジー**（22年）**長崎のザボン売り**（23年）**長崎の鐘**（24年）など名曲が勢揃いだ、中国も負けていない。

支那の夜・満州娘もいいが、一番人気はシャンハイだ。**上海ブルース・上海だより・上海の花売り娘**ときて、戦後の26年にも**上海帰りのリル**がヒットする。ところで東京だ。

花の大東京が舞台なのに実にイナカ臭い曲ばかりで、**東京だよおっ母さん・東京のバスガール**にしても集団就職で東京に出てきたイナカ娘の歌で、いかにもアカぬけない。

東京キッドや東京シューシャインボーイ・東京の花売り娘・東京アンナも似たようなものだし、**東京行進曲・東京音頭**もダサい。

このトーキョーも今は昔、武蔵の国の一寒村で、そこに太田道灌が城を建て、後に家康がちゃっかり徳川幕府の本拠地と勝手に決めてから急速に発展したのがエドである。

首都機能を持つ都市ともなれば必然的に人は集まる。そんな二ワカ都市に、地方出身者つまりイナカ者がドツと集まり、三代続けば江戸っ子として認知され、ひたすら大都市らしくなっていたのだ。家康だつて駿河（静岡）のイナカ者、やがて1868年に薩摩（鹿児島）と長州（山口）の、これまたイナカ者が乗り込んできてあらためて新生日本の首都に指名され、ますます人が集まる。

その際に東京と呼び名も変わるのだが、これにしても東にある京都が語源だから、とことんアカぬけない。それでも地方に比べれば西洋化は断トツだ。居酒屋はしゃれたカフェーになり、茶店はティールームやミルクホールホステスに模様替える。女給もこの頃からだ。

そんなアコガレが歌に託されるわけで、東

京礼賛的な要素が多いのも納得できるが、この年新しい波が歌謡曲界を襲う。それがフランク永井の一連のヒット曲である。

それまでの大衆歌謡にはなかったマイカーが「**夜霧の第二国道**」の、深夜の東京ライフが「**東京午前3時**」のテーマになっている。

♪ 真っ赤なドレスが よく似合う
あのコ思つて むせぶのか
ナイトクラブの 青い灯に
甘くやさしい サキソフォン
ああ 東京の 夜の名残りの
午前3時よ（繰り返し）

♪ おもかげまぶたに 裏路を
出れば冷たい アスファルト
似たコ乗せてゆく キャデラック
テイル・ランプが ただ赤い

ナイトクラブに始まる英語の連発が当時としては実にしゃれていて、この佐伯孝夫の詞に吉田正作曲のスローバラードが絶妙に合体し、低音の魅力のフランク永井が歌う。

今までの歌謡曲とチョツとばかり違うらしいことはワシら小学生にもわかったし、歌詞の意味を無視して口ずさんだものである。

その後も東京ソングは数多く作られたが、演歌が斜陽になってからはさっぱりだ。

港町十三番地

美空ひばりサンはますます好調で、この年も「**港町十三番地**」をヒットさせる。

今も昔も港をテーマにしたニッポンの歌謡曲は数多くあるが、この頃はマドロスさんがやたら登場する。「**ひばりのマドロスさん**」なんてそのものズバリもあれば、「ある時は片目の運転手、またある時はキザな紳士、ま

たある時は香港帰りの粋なマドロス……」といった具合に、片岡千恵蔵の多羅尾伴内シリーズにもよく登場したものだ。

マドロスはオランダ語で船乗りだが、イメージは北島三郎ではなくて石原裕次郎だ。

横シマの綿シャツなんか着て、ジャンパーを肩にかけ、マドロスパイプを片手に、海岸通りをコツコツと靴音を響かせながら歩く。

キセルに刻みタバコ、ダボシャツにゴムの長靴、市場をガニマタで歩いたりしない。

口元をゆがめてニヒルに笑うことはあっても、愛想笑いは絶対にしない。今降りた船はタンカー、一本釣り漁船ではいけない。母港は神戸か横浜。銚子・函館・石巻ではない。

♪ 長い旅路の 航海終えて
船が港に 泊まる夜
海の苦労を グラスの酒に
みんな忘れる マドロス酒場
ああ 港町十三番地

いつもゆれている海の上とちがって、やはりオカは落ち着く。横シマのTシャツに綿パンでピシッときめた海の男たちがマドロス酒場にやってくる。なじみの酒場に来ては思いっきり酔いつぶれる。ファッショングラスにウイスキーが大ジョッキに生ビールだ。

受け皿つきのブ厚いコップに焼酎とか、一升ビン片手に茶わん酒ではいけない。

乗せてきた荷を降ろし、水・燃料・食料を補給し終われば、やがて船は出て行く。

マドロスさんの束の間の休暇と恋は終り、今夜は船出だ。「もう行っちゃうの？」なんちゃって、なーに、別れたら次の人だ。

「俺のことは忘れな」この女もあきたナ、トーゼン男の方にも都合がある。

そんなマドロスさんも完璧に死語、港も今ではウォーター・フロントである。

ちゃんちきおけさ

三波春夫センセーのデビュー曲だ。

♪ 月がわびしい 路地裏の
屋台の酒の ほろ苦さ
知らぬ同士が 小皿叩いて
チャンチキおけさ
おけさ切なや やるせなや

屋台といえば駅前が相場だが、この曲では路地裏だ。駅前には帰りの通勤客目当てという存在理由があるが、路地裏となるとただわびしいだけだ。フランク永井がもはや戦後ではない都会イメージを強調する一方で、この曲では「わびしい」「ほろ苦さ」「切なや」などの貧乏臭さであふれている。

それが「やるせなさ」なのだろうが、知らぬ同士が小皿叩いて盛り上がることは今でもあるだろう。早稲田あたりで飲んだ時など、どこかで「都の西北」が流れてきたナと思ったら、いつの間にか肩を組み合って合唱していた、なんてことは珍しくなかった。

♪ ^{くに}故郷を出る時 持ってきた
大きな夢を さかずきに
そっと浮かべて もらすため息
チャンチキおけさ
おけさ涙で くもる月

おそらくは集団就職で上京、仕事になれるにつれて先も見えてくる。「東京だよおっ母さん」と殊勝な女の口もいる一方で、この曲に出てくる男どもはどうにも情けないが、気持は良くわかる。両A面のもう1曲が「船方さんよ」だが、股旅ものもマドロスものも今では聞かれない。やだねったらやだね。